



## お花畑の私とあなた

神戸大学 経済経営研究所  
准教授 岩佐 和道

茹でガエルは事実と異なることを、本稿を準備中に初めて知った。冷やしガエルはどうなのだろう。

戦前や戦時中の社会を覆う空気がどのようなものであったか、全く理解できないと長らく感じていたが、現在は実感としてとても良くわかる気がする。

LITERA というサイトの情報を鵜呑みにしている自分にとっては、何気なく購入したオルソブルー社製の息子のトレーナーに、「look the world」という文字と、大きなアプリケ「9 ☆」があることに気付いたとき、我々家族が警察官に見咎められる可能性を危惧するほどの社会情勢である（というのはもちろん言い過ぎである）。

その LITERA で、映画「この世界の片隅に」は、とても良い映画であるが、主人公の声優を演じる能年さんが事務所関係で揉めているためか、テレビではほとんど映画の宣伝がされていないとの情報を得た。

義憤に駆られた私は、単にそれだけの理由でその映画を見に行っただが、今回はその感想を記したい。（私は基本的に映画には興味がなく、その前に劇場で見た映画は、「ドラえもん 新・のび太の日本誕生」であるので、それを念頭において読んでください。）

映画はとても良かった。能年さんも良かった。私は彼女が話しているところを見たことが無いので、余計に良かったのかもしれない。

巷間では、日常の大切さに気付かされたという感想が、多々見受けられるようである。確かに、私も見終わって数日後、巨体を引き摺りながらのっそりと歩く妻の姿をもう見ることはないという現実と直面し、そのことに気付かされた。

この映画が説得力をもち、日常の大切さや戦争の恐ろしさを伝えることができている一因は、逆説的であるが、たいして不幸ではない主人公にあると思う。もちろん、ここでいう「不幸ではない」は、あの戦時中という意味である。

つまり主人公の住む呉は、軍港があるがゆえに爆撃にさらされているが、沖縄や中国、朝鮮のように地上戦があったわけでも、広島や長崎のように原子爆弾が投下されたわけでもない。ありていに言えば、第二次世界大戦やその後の戦争や紛争において発生した数多の被害者の中で、主人公が被った被害は軽微であるとさえいえる。

しかし、そのような人物を中心に据えることによって、この映画は、今の日常に暮らす私

たちに、戦争の恐ろしさについて鮮烈な印象を与える。

つまり、こういうことだと思う。

以前に、村上龍の著作「あの金で何が買えたか」に書かれていた記憶があるのだが、何千億円とか何兆円もの金額は、一般の私たちにとっては身近な金額でないために、まったくその大きさがイメージできない。それをイメージするためには、その金額を身近なものに置き換え…。

この話を戦争に置き換えると、幼い兄弟もろとも一瞬にして家族が全滅とか、結婚式場に誤爆され何十人も死亡などと聞かされても、その悲惨さが途方もないことは理解できるが、余りにも私たちの日常とかけ離れているため、その度合いについては実感しにくい。

しかし、戦時下で暮らす主人公の日常が徐々に変化し綻びていくさまは、それほど不幸ではないがゆえに、私たちが具体的にイメージできる範囲に収まりながらも、その悲しみがありありと伝わってくる。

そして、その悲しみの背後には、より巨大な私達の想像を超えるほどの被害、悲しみ、苦しみ、加害、理不尽さ…が厳然たる事実として存在し、戦争の非日常性が暗く満ち満ちているのである。

この映画が、どのような立場の人々によっても評価されているのは、その背後の部分を直接的に描かずに、主人公が紡いだ物語の解釈を視聴者にゆだねているからであろう。

遅々として進まないこの文章を書いている間にも、映画は観客動員数を順調に伸ばしているようであり、大変喜ばしいことである。

最後に、私の妻も先日無事出産し、母子ともに元気に過ごしていることをお伝えしたい。